

## 研究主題

子どもたちが今日学校にきてよかった、  
明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して  
～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る  
校長のマネジメントサイクル～



相馬市立桜丘小学校 校長 木村 裕之

## I はじめに

今年度 60 歳となり、役職定年を迎える。振り返ると、たくさんの児童・保護者や地域の方々・先輩や同僚に支えられた 36 年間だった。30 代半ばから 40 代半ばまで勤務した相馬市立中村第一小学校においてご指導をいただいた 5 人の校長先生方の教えは、現在校長を務めるうえで、大きな道標となっている。学校経営の基軸としている PDCA のマネジメントサイクルを強く意識したのはあの時だった。OT 校長先生から、「日頃の取組を福島県教職員研究論文にまとめてみては」と助言をいただき、「研究主題：学校課題解決に向けて、教育課程を有効に機能させる教務主任のマネジメントサイクル」で応募した時だった。

そこで、この教員生活の節目に、支えてくださった方々への恩返しの一つとして、校長としての取組をまとめることにした。

## II 主題設定の理由

### 1 今日の課題から

情報が経済的な発展のための道具から、環境面や人の暮らしも含めた社会基盤を支える道具になる社会 Society5.0 においては、社会は劇的に変化し、必要とされる知識も急激に変化し続けることが予想される。しかし、「Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」では、義務教育に求められるのは、常に流行の最先端の知識を追いかけるのではなく、学びの基盤を固めることであると確認された。共通して求められる力は、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」「科学的に思考・吟味し活用する力」「価値を見つけ生み出す感

性」と力、好奇心・探求力」が重要であると提言している。これは、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学びの実現」や、これまで進めてきた「生きて働く力の育成」といった取組が大きく変わることではないと考える。

ただし、私たち教師の役割については、再構築が必要な面がある。それは、元来の役割であった教え導くに加え、学びの支援者として「教えることから学ばせること」への意識や方法の転換である。

### 2 本県教育施策から

本県では、「第 7 次福島県総合教育計画」において、全ての子どもに必要な資質・能力の育成とともに、一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せである Well-being の実現を目指し、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの転換を進める「学びの変革」と、その実現に向けた環境づくりとしての「学校の在り方の変革」を柱に掲げ、6 つの施策を展開している。施策 2 「『学校の在り方の変革』によって教員の力、学校の力を最大化する」では、改定した「教職員働き方改革アクションプラン」に基づき、教員が自ら学び、児童生徒と向き合う時間の確保に努めることで、持続可能な教育環境の整備を推進している。

### 3 本校の実態から

#### (1) 児童

明るく素直で、人懐こい児童が多い。授業時の反応がよく、教師は一斉指導を進めやすいと感じている。一方、論理的思考が必要な問題や時間がかかる問題などに対しては、面倒がったり最後まで集中して取り組めなかったりする

児童が少なくない。

社会問題として取り上げられることが増えた、普通学級に在籍する特別な支援や配慮を要する児童については、本校においても増加傾向にある。年度当初に、発達面・健康面・生徒指導面から共通理解を図った「気になる児童」は、445名中59名であり、全校児童の約13%に当たる。そのうち普通学級に在籍している児童は46名である。

## (2) 教職員

学級数が多く、言語指導通級を2学級有しているため、多くの教職員を配置していただいている。また、子どもたちの成長のために熱心に教育活動に励む教職員がほとんどであり、これらは大きな強みである。

一方その構成には課題がある。常に児童と対面して教育活動を行っている教員は、管理職、産・育休中の教員や初任研メンターを除くと26名。内訳は、男性7名・女性19名で男女比が約2.7倍あり、20代10名・30代3名・40代3名・50代7名・60代3名、30代の最年長が32歳、40代の最年少が46歳、中間層の14年間分がすっかり抜けている。つまり、男女比が大きく、年代が若手とベテランの二極化した教員構成になっている。

## (3) 保護者・地域

創立70年と市内では最も歴史の浅い学校である。核家族世帯が多いものの、保護者が卒業生である家庭や近くに祖父母が住んでいる家庭が多い。市の中心地にあってアパート住まいの家庭が約13.8%いるが、ひとり親世帯は約11.5%と少ない。比較的安定した家庭環境で育っている児童が多い。

また、図書廃棄や受け入れ作業に苦慮をし、保護者ボランティアを募ったところ、多くの申し出があった。ボランティアで学校花壇の面倒を見てくださっている地域の方もいる。これらは、諸先輩方が築いてこられた、保護者や地域の方々との信頼関係があるからこそである。それゆえ、信頼し続けていただけるよう努力して

いく必要がある。

## (4) 研究経過

「表1 重点目標の変遷」のとおり、平成29年度からの7年中5年間は、さくらっ子（＝桜丘小学校児童の愛称、以下同じ）の弱みである低い自己肯定感と互いを認め合う心の希薄さの強化・改善をねらい、【よさ】に焦点を当てた重点目標を設定してきた。しかしながら、期待した結果を得られず、繰り返し取り組んできた」と推測する。

年度	重点目標
29	自分のよさ 相手のよさを 認め合おう
30	もっと認め合おう 自分のよさ 相手のよさを
R元	よく考えて 行動しよう
2	よさに気づき 高め合おう
3	よさを見つけ 高め合おう
4	・認め合い ・伝え合い ・学び合い
5	よさや考えを伝え合おう

表1 「重点目標の変遷」

学年の学級数が多いため、学年集団としてのまとまりが強かった。委員会等の各分掌においては、多い職員数を生かして複数人配置されていた。しかし、実際に機能していたのは主任に任命された教員だけであった。そのため、ベテラン教諭に学年主任や各種主任の役割が偏り、ベテラン講師が力を発揮する機会や若手教員が力を育み鍛える環境が十分ではなく、チーム学校として力を発揮できていないと感じた。

## Ⅲ 研究の構想

### 1 研究主題

子どもたちが今日学校にきてよかった、明日学校にくるのが楽しみな学校を目指して  
～学校課題解決に向け、学校経営方針の具現化を図る校長のマネジメントサイクル～

### 2 研究仮説

次の3つの学校経営方針を具現化していくことで、「Ⅱ 主題設定の理由」で挙げた諸課題に対応し、研究主題に近づく学校にしていくことができるであろう。

### 3 学校経営方針 資料1

(1) 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

ア 重点目標を軸に据えた教育活動の展開

イ 特別支援教育の推進

### (2) 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

ア 校務分掌のグループ制の導入・構築

イ 授業力向上につながる校内研修推進

ウ アイの取組を、人事評価の目標・手立てと連動

### (3) 安全・安心で信頼される学校であり続ける

ア 教職員一人一人が危機管理意識をもち、学校事故防止と児童の危険回避能力の育成

イ 教職員一人一人が高い倫理観をもった職務や立場に誠実に向き合い、不祥事防止

ウ 家庭・地域と密接に連携をして開かれた学校づくり

## IV 研究の実際

### 1 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

#### (1) 重点目標を軸に据えた教育活動の展開

教育目標の達成状況、学校課題解決に向けた取組の評価、児童の強みや弱み等を様々な角度から検証し、次年度の教育活動の柱として設定するのが重点目標であることは言わずもがなである。それゆえ、出来る限りの教育活動をこの重点目標に関連付けて計画・実施していくことが目標達成につながる。

ア PLAN

令和6年度の教育課程編成に向け、全教員が参画して日頃の教育活動からさくらっ子の強みと弱みを分析した。この結果をもとに鍛え伸ばしていきたい力について話し合いを行い、相馬市の重点事項である「自己マネジメント力の育成」と関連付けた。児童のこうしたい・こうなりたいという思い（＝なりたい自分）が、児童自身を具体的に行動（＝努力）させる。つまり、【なりたい自分】を具体的にイメージさせて目標とし、その目標の実現のために努力を重ねさせることが、より良い自分へと成長させ、自己肯定感を高めることにつながると考えた。ここから導き出して令和6年度重点目標を、

【めざそう！なりたい自分】とした。

イ DO

毎日多種多様な教育活動の実施計画案が起案されてくる。児童の安心・安全や教育効果だけではなく、重点目標との関連性や整合性の観点から意識的に指導・助言をしてきた。場合によっては、一緒に方向性や内容を確認しながら作成に関わった。

校長は、教職員を介して児童へアプローチするのが基本である。具体的には、後述する校務分掌グループに校長が働きかけ、「イ 縦割り班活動」を新規事業として令和6年度2学期に立ち上げた。また、校長が児童へダイレクトにアプローチをする機会は、「ア 全校集会」や行事等での校長挨拶や講話がある。

(ア) 全校集会 [資料2](#)

年間計画に月に1回の頻度で全校集会が位置付けられ、内容は校長に委ねられている。児童の状態や時期に応じ、スライドや具体モデルを使って視覚に訴えながら話してきた。話し始めは毎回必ず重点目標を児童に問いかけ、主内容は重点目標に関連付けて話すことを意識してきた。話し終わりも、スライドで重点目標を提示し、【なりたい自分】をイメージして努力をしていこうと呼びかけて締めた。

児童の【よさ】を認めて広げるため、朝の登校指導時に把握していた相手に伝わるよい挨拶ができる児童や、班長・副班長がしっかりと役割を務めて安全に気をつけて歩行している登校班等を、全校児童に継続して紹介した。

(イ) 縦割り班活動 [資料2](#)

○ ねらい：活動を通して交流を深め、協調性や仲間意識を育む。協力して活動を楽しみ、その活動を通して自主性と実践的な態度を育む。

○ 内容：1～6年生を38グループに分け、6年生の班長を中心に班活動（月に一度）。

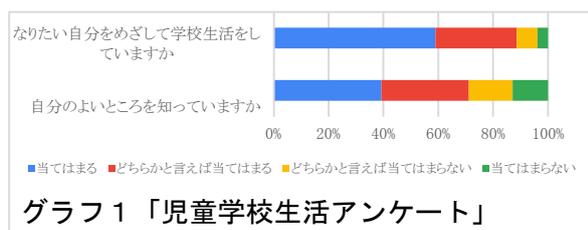
○ 活動の実際：6年生が良いリーダーシップを発揮し、1～6年生の異学年混在でも楽しめるように配慮して活動が繰り広げられた。

○ 6年生を送る会：「縦割り班活動」が、目的

達成や重点目標の具現化に機能していたため、実施計画案検討時に、後述する校務分掌グループに対して「縦割り班活動」を「6年生を送る会」に取り入れることを助言した。

#### ウ CHECK

「全校集会」や行事、学期の節目等で、【なりたい自分】を意図的に意識させてきた。重点目標【めざそう！なりたい自分】を、全児童が言えるほど浸透し、一般化した。しかしながら資料3にあるように、令和6年12月に実施した「グラフ1 児童学校生活アンケート」では、「なりたい自分をめざした学校生活」の問いでは、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」の肯定的な回答が88.7%だった。ところが、「自分のよいところの認知」の問いに対する肯定的な回答は71.2%だった。17.5%もの大きなギャップが生じた。



グラフ1 「児童学校生活アンケート」

自己肯定感を高めることにつながらなかった。2つの要因があると分析した。1つは、児童なりに集団を意識し、相対的に優れた力でなければ【よさ】として認めない傾向にあること。もう1つは、1年後や学期末の【なりたい自分】という大目標に対し、必要な条件や努力を小目標の【なりたい自分】として取り組む構造の理解は、児童にとって難しいものであったこと。つまり、「自己マネジメント力」自体が未熟であったことである。

#### エ ACTION 資料1

令和7年度の重点目標は、【見つけよう！自分のよさ めざそう！なりたい自分】とした。児童に浸透した【めざそう！なりたい自分】は継続し、【見つけよう！自分のよさ】を加えた。前述したとおりに何年もチャレンジをしてきたにもかかわらず、成果を出すことが難しかった【よさ】にあえて斬り込むことにした。さく

らっ子の弱みを、強化・改善していくためには避けては通れないと判断したからである。

それゆえ、覚悟を決めて前年踏襲を改め、取組の再構築をし、自己肯定感を高めるため、「さくらっ子スマイルカンパニー」と「さくらっ子賞」の2つの新規事業を、校長から各分掌グループに提案する形で立ち上げた。自己肯定感を高めるためには、勉強や運動に偏りがちな【よさ】を、様々な人格構成要素に広げて絶対的な価値として捉えられる必要がある。そこで、これらの活動を通して児童が異学年の仲間や教職員と関わることで、自分の【よさ】の価値を広げ、【よさ】に気付く機会とした。

#### (ア) さくらっ子スマイルカンパニー 資料4

○ 培う力：よりよい学校生活を築く自主的・実践的態度。よりよい人間関係を築く力。役割や目標を考えた責任ある行動力

○ 会社設立の条件と制限：人のために活動、自主性を尊重、笑顔を広げる活動、校内で活動、費用がかからない、動物等の飼育はNG

○ 参加の仕方：会社設立は5・6年生、社員は1～6年生

○ 会社設立状況：18社（7月末）。挨拶、清掃、休み時間一緒に遊ぶ会社等

#### (イ) さくらっ子賞 資料4

○ 効果：表彰を通して【よさ】の価値を広げ、【よさ】を認める。表彰者を通して努力を継続し、人のために尽くす人を憧れや目標とする

○ 方法：教育目標の知・徳・体3部門で、メダルと賞状を学期末に授与。対象者は、発達段階を考慮して3年生以上。結果だけでなく、対象児童の努力の過程が物語としてエピソードになっていることが規準。

#### オ 結果

行事や教育活動において、担当教員が重点目標の文言を意図的に使う場面が増えた。児童・教職員ともに、重点目標に対する意識が確実に高まっている。

児童は、「3 本校の実態から『(1) 児童』」で述べたとおり、さくらっ子の【よさ】として

の素直さが生かされ、善いことを積極的にやっていく雰囲気が高まってきている。そこに、「さくらっ子賞」として2名の児童に資料4の賞状とメダルを授与した。何人もの児童が、「さくらっ子賞」がもらえるメソッドを校長や周りの教員に質問してきた。2学期は、意識をして善い活動をする児童が増えるに違いない。

教職員は、会話に児童の【よさ】を共有している場面が増えた。週案の反省の記述が、「課題」から【よさ】に関わる内容に変わってきた。通知表の総合所見の内容が、採用や経験年数に関わらず様子をとおした【よさ】の価値づけを意識するようになった。資料5

## (2) 特別支援教育の推進

### ① 校長室開放

#### ア PLAN

着任後、教室に入れない、教室から出てくる児童が、事務室や廊下に何人もいた。そのほとんどの児童が、発達に課題を抱えていることがすぐに感じ取れた。この児童たちには、居場所やクールダウンができる場所が必要であることも理解できた。本校には、市教育委員会が特別教育支援員を4名配置してくださっていた。この方々にはすでに支援をお願いした学級や児童がいる。中学校のSSRのような余剰教室はなく人員もいない。

#### イ DO

校長室の戸を寒くても暑くても開放した。廊下や事務室にいた児童が、少しずつ距離を縮めてきた。前のめりにならず、パソコンを打ちながら他愛のない会話に付き合っていると、校長室に直接登校してくるようになった。勉強に付き合ったり、ソーシャルスキルトレーニングをしたりした。向き合って話ができるようになると、長期や短期の将来についても話題にした。

#### ウ CHECK

多くの児童が、学年が変わるタイミングで自教室に登校し、集団生活ができるようになった。すると、別な児童が入れ替わって出入りするようになった。

校長室に児童が自由に出入りをしたり、校長室内で自由にふるまったりしていることを不適切に感じる教職員もいた。

#### エ ACTION

課題を抱えた児童の教室環境に配慮することを目的の1つに、2年に一度ではなく毎年全学年の学級編成を行うようにした。

教職員に、配慮を要する児童の対応に関する考え方について資料6の説明をしたところ、理解を得、立場に応じて工夫して関わってくれるようになった。特性に応じた児童の居場所が増え、廊下等をさまよう児童がいなくなった。

### ② 適切な就学指導

#### ア アセスメント

適切な就学指導は、対象児童や保護者のニーズを把握することから始まる。それゆえ、細やかなアセスメントは欠かすことができない。

「3 本校の実態から『(1) 児童』」で述べたように年度初めに「気になる児童」として、生徒指導・特別支援教育全体会で確認をした。その後も、月に一度全体会を開いてこれらの児童の様子について定期的に共有をしてきた。

私自身も時間をつくって各教室を回り、気になる児童のアセスメントをした。主要教科・技能教科・休み時間・給食など、活動内容による様子の変化も意識をして観察した。気になった児童については、担任や特別支援コーディネーターと内容を共有し、必要に応じて校内支援委員会を招集してケース会議を行った。

#### イ 教育相談

先の校内支援委員会での協議をもとに、「表2 年度ごとの教育相談件数」のとおり、保護者との教育相談を行ってきた。参加者は、対象児童の両親・校長・特別支援コーディネーター・担任・その他（児童の実態に応じて養護教諭や言語通級指導担任）としている。家庭に戻ってからの保護者間の認識や考え方のズレによるトラブルを防ぐため、両親そろって参加してもらえるよう調整をしている。

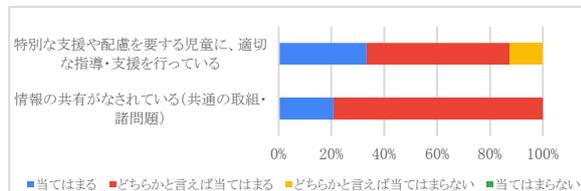
相談の中では、学校の様子や家庭での様子を

伝え合い、困り感を顕在化したりニーズの確認をしたりし、家庭・学校それぞれの支援の在り方について共有をした。また、相談は一度で終えず、次回以降の見通しも確認するようにした。繰り返し相談を重ねることで、対象児童が能力を伸ばせる教育の場についても協議の話題となり、適切な就学指導につながっている。

R 5年度相談件数：のべ 20 件（R 6 新規入級 3 名）  
 R 6年度相談件数：のべ 14 件（R 7 新規入級 2 名）  
 R 7年度相談件数：のべ 7 件（7 月末現在）

表 2 「年度ごとの教育相談件数」

ただし、令和 6 年度末に調査した「グラフ 2 学校経営・運営評価」資料 7 では、いずれも「どちらかと言えば当てはまる」の評価が多い。



グラフ 2 「学校経営・運営評価」

直接的に関係した担任でない見えにくい部分があったり、(2)①の「校長室開放」に対する不信があったりしてのことと反省した。情報発信や共有の仕方を工夫していく必要がある。

## 2 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

### (1) 校務分掌のグループ制導入・構築

#### ア PLAN

令和 6 年度から、チーム学校として効率的に効果的な取組ができるよう、校務分掌のグループ制を導入した。学年集団を横の関係、対管理職を縦の関係、校務分掌組織をグループ化して斜めの関係とすることで、ネットワーク型職場の構築を目指した。教職員一人一人が、ミドルリーダーとして力を高めて教育活動を充実させることがねらいだ。

#### イ DO

全校務分掌を資料 8 のとおり 6 つのグループにカテゴライズし、若手とベテラン・新規異動の教員と先達教員で構成するよう配置した。

各グループが担うメインの活動を「表 3 校務分掌グループの教育活動」のとおり明確にし

た。グループ内で、共通目標を達成するための協働意識や責任感を刺激するようにした。

- |                 |
|-----------------|
| A : 学力向上・現職教育   |
| B : 生徒指導・特別支援教育 |
| C : 安全・防災教育     |
| D : 地域協働連携・体験活動 |
| E : 道徳教育・特別活動   |
| F : 健康教育        |

表 3 「校務分掌グループの教育活動」

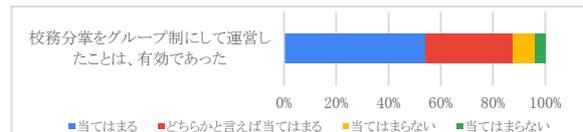
次に、主任だけが動くのではなく、グループとして機能するよう、グループ会議を年間計画に位置付け、グループ会議・運営委員会・職員会議、それぞれの役割について資料 9 のとおり明確にした。そして、これらを確実に運用していくため、「表 4 各会議の系統性」のとおりに年度始めの会議に系統性をもたせた。

- |   |
|---|
| 1 職員会議①：学校経営方針                              |
| 2 運営委員会①：グループ会議・運営委員会・職員会議の役割、各グループ強化内容等の共有 |
| 3 グループ会議①：強化内容、職員会議②への提案・共有内容の協議            |
| 4 職員会議②：各グループからの提案内容の協議、確認事項の共通理解           |
| → 新年度の教育活動スタート                              |

表 4 「各会議の系統性」

#### ウ CHECK

令和 6 年度 1 年間校務分掌グループを運用した結果、「グラフ 3 学校経営・運営評価」資料 7 では、87.5%が取組として有効だったと評価し、継続するべきとのコメントも多数あった。ただし課題もあり、グループによる負担の偏りについて多く挙げられた。



グラフ 3 「学校経営・運営評価」

#### エ ACTION

課題の負担偏りに対し、令和 7 年度は、グループのカテゴライズの微調整と、業務内容や量に応じて構成人数に軽重をつけた。

## オ 結果

職員会議や運営委員会の場で課題案件が顕在化した時に、グループにもち帰って検討して報告・再提案しますと対応する場面が増えた。

主任や担当者は、相談体制が確立されたことによって安心して業務推進ができ、位置付けた会議日以外資料9にも、互いに声を掛け合ってグループ会議をもっている。

職員会議の要項や案件集約資料10をグループ主体にしたことで、教職員の主体性を引き出し、教頭の業務削減につながった。

### (2) 授業力向上につながる校内研修推進

#### ア PLAN

児童の「できた・分かった」を支えるのは、教師の授業力である。この授業力を高めるため、有用性を感じ、主体的な参加意欲を促す校内研修の在り方を検討した。

令和6年度は、指定を受けていたリーディングスキル研究推進校が他校に移り、相馬地方小教研算教科の研究指定が3年目で発表がない状況を踏まえ、授業力向上に特化した校内研修へと舵を切ることを研修主任に提案した。実践していくために「表5 校内授業研修条件」について確認・共有をした。

- 複数回の授業研究を行う。
  - ・ 自学級で時期をずらして実施
  - ・ 同一内容を自学級と隣接学級で実施
- 学習指導案はA4用紙1枚に収める。
- 事前研は行わない。

表5 「校内授業研修条件」

#### イ DO

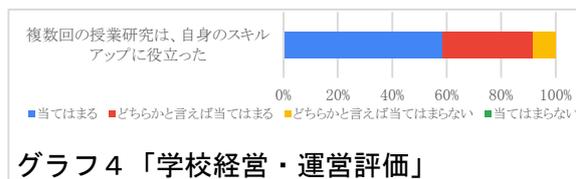
前述したとおりに小教研算教科の指定が1年間残っていたため、「算数班」と「リーディングスキル班」の2班体制で実践を重ねた。自分の学級で時期をずらし、同じ手立てで実践した教員が約1/3、同一内容を隣接学級で行った授業の反省を反映させて自学級で実践した教員が約2/3だった。中には、学年3学級を利用して3回実践した教員も複数名いた。

校長は、通常学級17・特別支援学級3の合計

20学級×2+αで約50回弱の授業研究を全て参観し、事後研究会で指導・助言を行った。

#### ウ CHECK

令和6年度は、1年間複数回の授業研究を校内研修の軸として運用した結果、「グラフ4 学校経営・運営評価」資料7では、91.6%が自身のスキルアップに役立ったと評価した。



課題としては、互見授業回数増に伴って自習体制の回数も増え、授業進度や児童への影響や負担が大きかったとの意見が複数あった。

#### エ ACTION

令和7年度は、小教研が新しいサイクルになったことで、研究指定がなくなった。そこで、研究教科を主要教科に広げて個人選択にし、教科ごとのグループ研究とした。これにより、課題であった互見授業の回数を抑えることができた。ただし、学校としての統一性を担保するため、全員が参観する講師招聘の授業研究を3回設定した。

## オ 結果

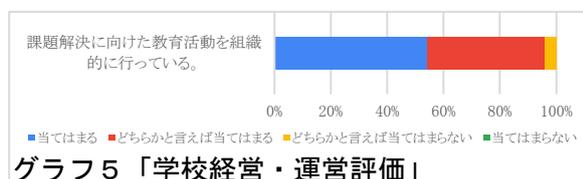
小学校では、多くの課題や事情で教科担任制を完全導入するのは難しい。それゆえ、その日と同じ内容の授業は最短でも1年後、多くは数年後、教科書改訂で二度とできない場合もある。隣接学級を使うことで、限定的な教科担任のように、実践した反省を翌日の授業に反映させることができた。自学級で時期をずらして同一手立てで実践した教員は、柱とする手立てに対する意識を高め、1回目から2回目までの間に意図的に児童を鍛えてその手立てが確実に機能するようにした。

これらにより、授業を企画し構想する力、児童の実態に応じて適切に指導する力、授業を評価・改善する力を培うことにつながった。一人一人の教職員が課題とする力の向上につながる取組となっている。

### (3) 人事評価の目標・手立てと連動

人事評価制度説明時に、資料11シートを提示し、重点目標や学校経営方針をもとに作成した学校経営運営ビジョン資料1と、人事評価制度の関係について整理をして説明した。

期首面談時には、その内容を目標や手立てに反映させるよう、指導・助言を行った。中間面談や期末面談時には、進捗状況や結果がわかる資料を提示しての説明を求めたことで、日々の教育活動を学校経営運営ビジョンと関連付けて意識的に実践するようになった。「グラフ5 学校経営・運営評価」資料7では、95.8%が教育活動を組織的に行っていると評価した。



### 3 安全・安心で信頼される学校であり続ける

この項目は、日々の教育活動を積み上げていく土台となる部分である。それゆえ、どの学校でも力を入れて取り組んでおり、学校ごとの独自性を説明するのは難しい。そこで、校長が直接、もしくはよりマネジメントを発揮して関わっている取組を1つずつ述べる。

#### (1) 教職員一人一人が危機管理意識をもち、学校事故防止と児童の危険回避能力の育成

○ 各種避難訓練・安全教室 資料12

ア PLAN

各種避難訓練や安全教室での活動を通し、児童が自らの危険回避能力を高める。

イ DO

全ての訓練と安全教室において、「表6 校長の話の内容」のとおり毎回同じ内容にした。

- ・自分と自分の大切な人の命を守るためにやる
- ・命を守るためだから、本気で取り組む
- ・本気だから、命を守るための正しい知識を身につけ、良い判断力を鍛えられる

表6「校長の話の内容」

ウ CHECK

回を重ねるごとに真剣に取り組み、無駄話を

する児童がいなくなった。放送があると、動きをやめて耳を傾ける児童が多くなった。状況に応じた対応力を培っていく必要がある。

エ ACTION

各種訓練や安全教室の想定や内容について、バリエーションを増やしていくように担当グループに指示をした。

#### (2) 教職員一人一人が高い倫理観をもち、職務・立場に誠実に向き合い、不祥事防止

○ 会計システムの見直し

約5年前に不適切な会計処理があった。会計取扱者によって処理の仕方が異なる現状があった。会計システム再構築の必要性を感じた。

ア PLAN

取扱者によって処理の仕方が異なることがないよう、工夫の余地がない会計システム構築を目指した。まずは、適切な会計処理のため、新システム構築について教職員に宣言し、「表7 新会計システム構築工程」を示した。

- |                        |
|------------------------|
| R5：会計処理データを収集して現状把握    |
| R6：学校一括会計の部分導入（紙類、その他） |
| R7：学年費適正価格決定           |

表7「新会計システム構築工程」

イ DO

提示した工程に従い、令和5年度は、主査と学年から1名ずつを会計処理担当者として任命した。全学年の学年会計で執行されている品目や時期をデータ化した。

令和6年度は、印刷経費代として児童一人当たり1000円を学年費に設定した。年度や学期のスタート時ごとに、会計処理担当者会議を年間計画に位置付けた。学年費と教材費の処理の仕方を明確にした。曖昧であったノートや紙ファイルの取り扱いを、全員同じ物を使わせる場合は、教材費として計上するよう統一をした。あわせて、教材費は、発注状況と使用状況を一覧資料13で確認できるようにした。

令和7年度は、学年費2400円のうち印刷経費以外の1400円について令和6年度の使用状況を検証し、学年費の適正額を検討している。

## ウ CHECK

令和5年度のデータ分析により、紙類において学校一括会計を導入することで、工夫の余地のない会計システム構築に近づくと分析した。

令和6年度は、印刷経費代1000円が適正であったかについて検証した。具体的には、校内での印刷総経費に対し、相馬市需要費消耗品費から印刷経費代として支出した割合と、家庭徴収金から支出した割合を、令和2年度からの5年分を比較した。その割合は、約7対3と5年間大きな変化がなく、適正と判断した。

## エ ACTION

令和6年度から、教科で使用する画用紙や模造紙以外の紙は学校で一括購入することにした。そのため、児童一人2400円の学年費から年間1000円を印刷経費代として学校会計「印刷費」へ繰り入れることにした。

## オ 結果

印刷経費を学校一括管理にしたことで、学年会計の約4割を縮めていた用紙代の処理がなくなった。処理の割合が減ればミスも減るはず。さらには、学年ごとのスペースが必要だった印刷室の用紙置き場に余裕が生まれ、整理整頓にもつながった。

過去の会計を検証したことで、PTA協力費から印刷経費を支出せざるを得なかった年度もあったことが分かった。市費と児童一人当たりの印刷費に限定できたことも、ミスを減らすことにつながるに違いない。

### (3) 家庭・地域と密接に連携をして開かれた学校づくり

#### ○ ホームページ更新

諸先輩方のご尽力により、保護者や地域から得ている信頼を継続していくためには、学校で行っている取組や児童の様子を発信することだと考えた。そこで、ホームページの更新作業は、校長の役割と決めて「表8 ホームページ更新件数」のとおり行ってきた。

R5 : 364件	R6 : 530件	R7 : 154件 (7月末)
-----------	-----------	-----------------

表8 「ホームページ更新件数」

## V 研究の考察

### 1 児童自身に「できた・わかった」の成長実感を積み重ねさせる

○ 相馬市では、毎月8項目のいじめ調査資料15を実施している。同一集団の3年分の変容が「表9 相馬市小・中学校いじめ調査」のとおり、総数とともに減少している。これは、【なりたい自分】を目標として努力すること、【よさ】の価値を広げて【よさ】を自覚する機会を意図的に設定してきたことが、児童の安定した学校生活につながったと考える。

	1学期総数	R7入学	R6入学	R5入学	R4入学	R3入学	R2入学
R5	251	-	-	72	5	86	12
R6	293	-	46	92	12	33	12
R7	119	16	19	45	4	29	6

「表9 相馬市小・中学校いじめ調査」

● 今後も、【よさ】の価値を広げて【よさ】を自覚できる機会を意図的に設定し、児童の自己肯定感を引き上げていく必要がある。

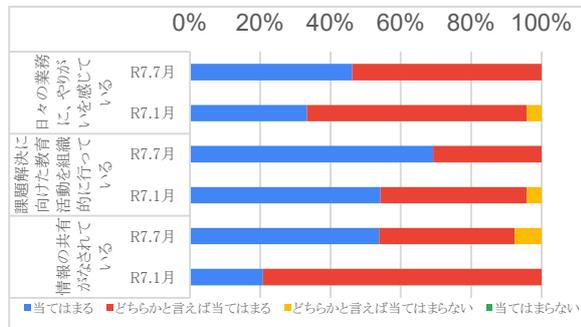
### 2 学校チーム力、教師力の強化・充実を図る

○ 全員が役割を担う体制が整ったことにより、一人一人が責任感をもちつつ相互の関わりを深めてネットワーク型の関係性が構築され、組織力の強化につながっている。

○ 若手や新規異動者にとっては、グループ内で役割を担うことで、力を培ったりスムーズに業務推進ができたりし、グループがOJTの機能を果たしている。課題とした職員構成二極化に対する手立てとして機能している。

○ 令和7年7月にも質問内容を減らして「学校経営・運営評価」資料16を受けた。「グラフ6 学校経営・運営評価」が示すとおり、「業務にやりがいを感じている」教員が増えた。これは、6年度末の結果を受けて校務分掌グループや授業研究等について修正・改善を行ったことが反映されたものと考え。その相関として、「課題解決に向けた組織的取組」や「情報共有」の結果も伸びたと考える。働き方改革といえば、業務の精選や効率化を図った時間短縮に視点がいきがちである。私は、教職員一人一人が、日々の業務にやりがいを実感しながら業務推

進することも、働き方改革として必要な視点であると考えている。教職員一人一人がやりがいを実感できれば、自ずと業務の効率化が図られ、時間短縮にもつながるからである。「やりがいを実感」してくれている教員の率が伸びているのは大きな成果である。



グラフ6 「学校経営・運営評価」

私たち教職員が抱えている業務は、幅広く量も多い。業務過多が顕著になると、日々の業務をこなす事が目的になり、前年踏襲が当たり前になりがちである。しかし、桜丘小学校の教職員は、今年度新規事業を立ち上げ始めた。(児童会を動かしてのいじめ宣言等資料14) これは、教職員自らが「やりがい」を求めた能動的な動きであり、自分達で「働き方改革」を始めたサインと捉えられる。

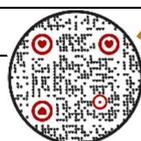
● 教職員の本音の声を聞き、校務分掌グループ編成の微調整を継続する必要がある。

### 3 安全・安心で信頼される学校であり続ける

○ 令和5年4月から令和7年7月末までの間、交通事故や学校事故が発生していない。教職員の不祥事も起きていない。教職員はもとより、児童も自らの言動に対して自覚と責任をもって学校生活を送るようになってきており、地域の方から、登校中の様子がよくなったと言われるようになった。

○ 学校ホームページのアクセス数「表10 ホームページアクセス数」が飛躍的に伸びた。PTA関連の各種会合への出席率も伸びた。いずれも、学校の教育活動に対して関心をもっていただいていることの表れであると考える。

令和5年4月：約8千件



HP

令和6年4月：約3万件

令和7年7月：約9万8千件

「表10 ホームページアクセス数」

● 学校事故が発生していない状況や学校に関心をもっていただいている状態を継続していくこと。そのための具体的取組を行うこと。

## VI 終わりに

主役は児童であり、支えるのが我々教職員や保護者である。この三者に対して3つの学校経営方針を具現化する形で具体的手立てを講じ、PDCAを意識してマネジメントしてきた。

学びの変革を進めるチーム学校として、教職員が進んで挑戦をし、変化を感じて工夫や創造を始めたチーム桜丘は、素晴らしいチームに成長してきていると確信する。今後も、取組への精度の高い評価を得て丁寧に検証し、効率よい効果を得るためのビルド&スクラップをいとわず、常にバージョンアップを図り続けていき、チーム力を培い成長させていく。

主役である児童は、いくつかの取組により、安定した学校生活と日々を目的的に生活していく手がかりをつかんだ。今後も様々な角度からアプローチを続け、「今日来てよかった・明日来るのが楽しみな学校経営」を目指していく。



**資料2 全校集会・縦割り班活動**



縦割り班活動（月に一度）

6年生が毎月、1～6年生みんなで楽しめるよう、配当場所に応じた活動を工夫して考えている。



縦割り班のメンバーから寄せられた言葉を嬉しそうに読み込む6年生



6年生を送る会（3月）



全校集会（月に一度）

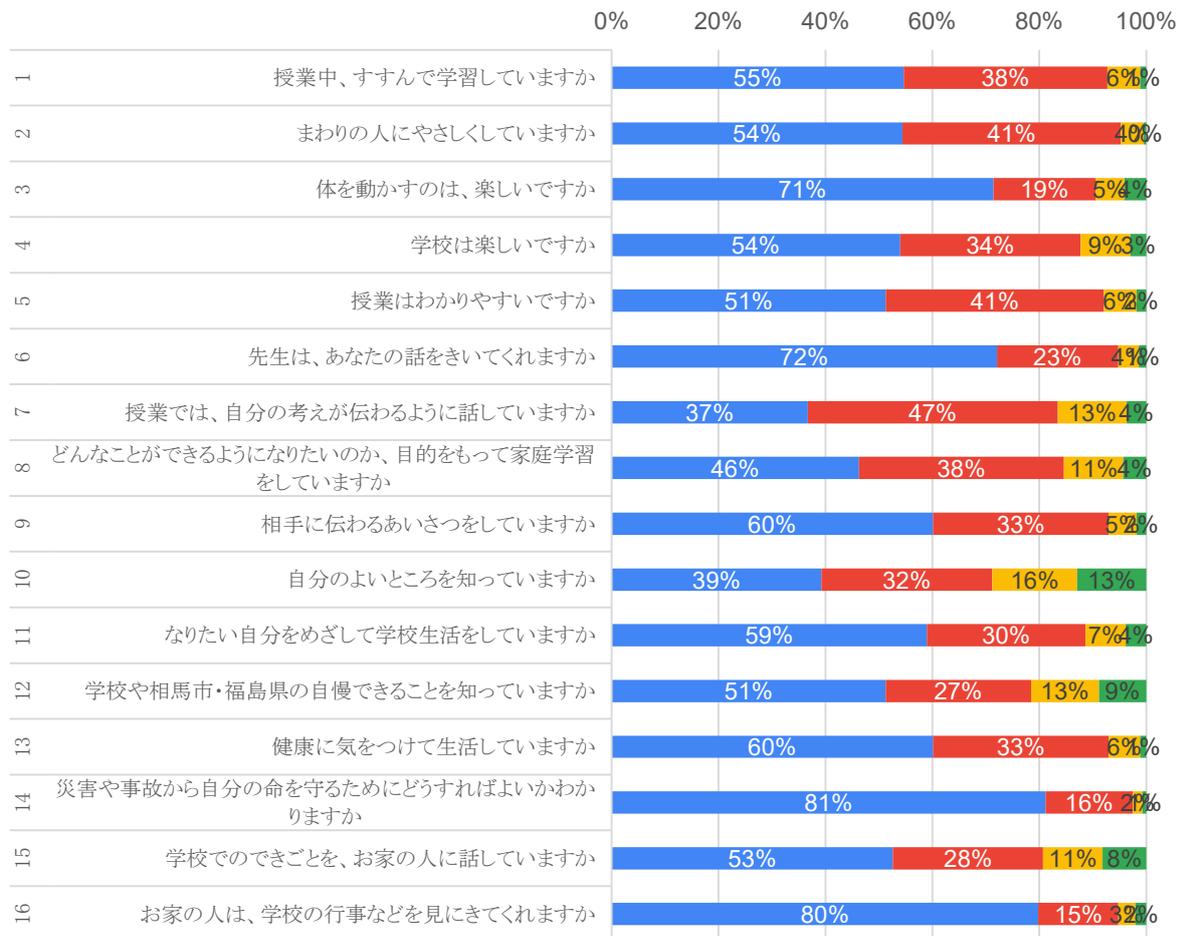
月に一度の全校集会。内容は校長に委ねられている。左は、毎回の重点目標確認の様子。右は、相手に伝わる挨拶名人を学年1人ずつ紹介



令和6年12月実施。相馬地方小学校長会の研究と連動させた。質問に対する回答精度を上げるため、極力ダブルバーレルとしないアンケート内容にした。

**資料3 令和6年度 児童学校生活アンケート**

児童学校生活アンケート



■当てはまる ■どちらかと言えば当てはまる ■どちらかと言えば当てはまらない ■当てはまらない

資料4 さくらっ子スマイルカンパニー・さくらっ子賞

月水金に昇降口で挨拶



あいさつニコニコ会社(6年)

毎朝各教室に出かけて挨拶



カラッコレインボ-会社(5年)

放課後、教室や共有場所清掃



放課後会社(6年)



活動状況通知掲示板

校長は授与するにあたり、白手袋を装着してその価値を高める演出

授与メダルは、この賞の価値を高めるために金型を作成して特別注文した。PTA役員に相談をし、「PTA資源物回収」の益金を、メダル代にさせていただくことにした。さらに、児童が登校時に持参しやすいあき缶は、通年で集めることにし、児童・保護者に周知した。



1学期終業式さくらっ子賞表彰



さくらっ子賞表彰者



さくらっ子賞用メダル

「さくらっ子スマイルカンパニー」と「さくらっ子賞」について保護者に周知した学校だより

～『よさ』の価値を広げ、

『よさ』に気付かせるために!②～

令和7年度学校重点目標【見つけよう!自分のよさ めざそう!なりたい自分】を表現していくために、2つの新しい取り組みをスタートしました!

●さくらっ子賞・教育目標「考える子ども」「心豊かな子ども」「誰やかな子ども」に応じた3部門で、目に見える成果だけではなく「努力」を称え、メダルと賞状を学期末に授与する。他の子どもたちにとって、憧れや目標になる賞となるよう価値ある賞としたい。対象者は、発達段階を考慮して3年生以上とする。

●さくらっ子スマイルカンパニー:

学校や学校にいる人を笑顔で元気にするための会社を設立して活動する。会社を設立できるのは、5・6年生。その会社の趣旨に賛同できる人は、1～6年生だれでも社員になれる。

良いアイデアが浮かんだ5・6年生は、次の構想を練って学校内の教職員に相談をする。相談する教職員は、誰でもOK。

■会社名 ■会社設立の理由 ■活動内容 ■活動日 ■募集人員



5月21日(水)の全校集会のときに、子どもたちにも話しました。ぜひ、「さくらっ子スマイルカンパニー」の活動を通し、よりよい学校生活を築こうとする自主的・実践的な態度を養い、桜丘小学校の一員としての自覚をもち、よりよい人間関係を築く力を育ててほしいと希望しています。

＝資源物回収の益金活用＝

さくらっ子賞で授与するメダルは、既成のものではなく、子どもたちが憧れをもって「さくらっ子賞」を目指すことができるよう、オリジナルの金メダルを作成します。しかし、学校予算内では難しい金額であるため、PTA三役会で役員さん方に相談をしたところ、『資源物回収の益金』を充てることをご提案いただきました。令和5年9月からスタートした資源物回収ですが、これまで活用せずにプールに捨ててしまっていました。今回合わせて4回分になります。ただし、それでもかなり不足しています。ぜひ、今後も資源物回収へのご協力をお願いいたします。

そこで、『アルミ缶』については、通年で集めていきます。少しずつかまいませんので、登校時に子どもたちに持たせていただくと、負担が少なくて集めることができます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

さくらっ子賞  
六年

あなたは本校教育目標「心豊かな子ども」の部において、一学期間大変よく努力を重ね他の児童の模範となりました。困っている友達を助けてくれたり、心の優しい、周りに通されず正しいことを行う公正・公平な心の強さ。スマイルカンパニーの代表として、より良い学級生活のため仲間と協力して取り組んだ放課後の清掃活動など自分のできることをやりぬく実践力。これらは、初代さくらっ子賞を受賞するに値する素晴らしい成長した姿でした。今後のさらなる向上を期待し、これを賞します。

令和七年 七月十八日  
相馬寺立桜丘小学校校長 木村 裕之  
PTA会長 田河 朋寿

受賞者の努力を具体的にたたえ、他の児童の目標や今後の見通しにできるような文面にした。

さくらっ子賞  
五年

あなたは本校教育目標「心豊かな子ども」の部において、一学期間大変よく努力を重ね他の児童の模範となりました。登校班長としての、下学年への心配り、機嫌よく通ってくださったドライバへのさあわせや、遅く帰った時でも、周りの人を幸せにしました。地味な明るく、周りの人を幸せにしました。学校生活では、落ちているゴミや配付物など、泳いで見て見ぬ振りせず、さりげなく回収したり、誠実に努力を重ねました。これらは、初代さくらっ子賞を受賞するに値する素晴らしい成長した姿でした。今後のさらなる向上を期待し、これを賞します。

令和七年 七月十八日  
相馬寺立桜丘小学校校長 木村 裕之  
PTA会長 田河 朋寿

さくらっ子賞授与賞状

**資料5 令和7年度1学期通知表総合所見**

通知表作成前に、総合所見について指導・助言を行った。様子の伝達で終わることなく、様子を通して児童のどんな力が伸び・身に付いたかを「よさを価値づけ」て所見とするよう、例を示して説明をした。下のとおり、採用や経験年数に関わらず「よさ」を意識して所見を作成した。

令和7年度 第5回職員会議校長資料  
令和7年6月13日

1 教育活動について  
(1) 学期末に向けて  
○ 『よさ』の価値観は広がり、自分の『よさ』を認める子どもは増えてきているか。  
○ 通知表の評価→主要教科において、思考・判断・表現は、獲得した知識・技能を使って培う力であるため、「知識・技能=2」で「思考・判断・表現=3」という評価はない。  
○ 通知表所見⇒評価したこと（伸びて育ってきている力・努力が必要な力）について、その根拠をわかりやすく説明する。具体的なエピソードは説明をわかりやすくするために短く。エピソード（様子）の伝達で終わらない。

※ 「社会科「店ではたらく人」や「くらしを守る」の学習で作成した新聞では、イラストや吹き出しを上手に使って、見学して分かったことを記事にまとめました。（エピソード）  
+ 内容の理解を深めただけでなく、情報を活用する力も高めました。（評価）

<p><b>第1学年 20代採用2年目</b></p> <p>算数科「ぜんぶでいくつ」の学習では、たす数とたされる数が入れ替わっても答えが同じになることに気付き、たしざんの規則性を理解することができました。数の構成の理解が進み、計算力が高まっています。生活面では、友達に対して優しく接し、周りの様子をよく見て行動することができています。教室のごみを積極的に拾ったり、水筒を忘れないように友達に声をかけたりと細やかな気配りが素晴らしかったです。</p>	<p><b>第1学年 20代大卒初任者</b></p> <p>ひらがなの学習では、1文字ずつ形や書き順に気を付けて練習したため、五十音を正しく書くことができました。その成果もあり、ノートやプリントの字も見やすいです。教師や友達の話を熱心に聞く態度が身に付き、話を聞いたあとはすぐに行動に移すことができました。学習も生活も前向きに取り組みました。学級では、配り係として活動を行うことができました。困った時は友達と相談し、考えて取り組みました。</p>
<p><b>第2学年 50代先達者</b></p> <p>音楽科「ドレミであそぼう」の学習では、「ドレミの歌」に合わせた身体表現を通して音の高低を理解し、伸びやかな歌声で楽しく歌うことができました。「かえるの合唱」の伴奏では、指をスライドすることで無理なく演奏できることに気付き、何度も練習に取り組むことで演奏の技能を高めました。学級では保健カード当番として責任をもち、毎日の健康観察カードを友達と協力して保健室に届ける姿が見られました。大きな声で元気に挨拶や返事ができることが素晴らしいです。</p>	<p><b>第2学年 20代採用2年目</b></p> <p>国語科では、進出漢字を確実に身に付けたり言葉の意味を正しく理解したりすることができました。身に付けた漢字や語彙を生かし、物事の順序を適切に捉えて説明文を読んだり、場面の様子を豊かに想像して物語を読んだりする力を伸ばしました。体育科の新体力テストでは、反復横跳びや立ち幅跳び、シャトルランなどで少しでも良い記録を出そうと意欲的に取り組み、跳躍力や俊敏性、全身持久力を伸ばしました。清掃当番として、昼休みに教室のごみを箒で掃く仕事に取り組みました。</p>
<p><b>第3学年 20代2校目今年度異動者</b></p> <p>算数科の「わり算」の学習では、問題の意味をよく理解して式を立てたり、正確に答えを求めたりすることができ、確かな計算力を身に付けています。理科「風やゴムのはたらき」の学習では、風やゴムの力を利用して物を動かす仕組みに興味をもち、友達と協力して実験に取り組み、理解を深めました。学習当番として、次の時間の学習の準備物についてみんなに伝えることができました。</p>	<p><b>第4学年 20代講師今年度中学校からの異動者</b></p> <p>算数科の「角」の学習では、分度器を正しく使い、角を正確に測ることで操作技能を身に付けることができました。また、180度より大きい角度についても、360度からどの角度を引けば答えが出るのかを理解しており、角の大きさの見方・考え方を高めました。まわりの友達の様子をよく見て、困っている人に声をかけたり、手伝ってあげたりするなど、優しく接することができました。</p>
<p><b>第5学年 30代採用3年目</b></p> <p>黒板当番として、黒板消しを友達と協力しながら責任をもって取り組みました。国語科「銀色の裏地」の学習では、登場人物の関係を図でまとめることができました。叙述を基に登場人物の心情の変化を捉えることで読む力を高めました。算数科「合同と三角形、四角形」の学習では、三角形の合同な図形を3つの構成要素で作図できることを理解し、作図の技能を身に付けました。</p>	<p><b>第5学年 40代今年度異動者</b></p> <p>児童会企画・運営委員として、いじめ防止宣言の内容を学級で検討するために学級会を開いたり、全校児童へ放送で呼びかけたりと責任をもって取り組むことができました。国語科「みんなが使いやすいデザイン」の学習では、トイレのバリアフリーについて情報を集め、整理することができました。また、伝えたいことを明確にして報告する文章を書くことで、表現する力を高めました。</p>
<p><b>第5学年 20代今年度大卒新採用</b></p> <p>いつも友達と笑顔で接しています。相手の立場や気持ちを考えながら行動している姿はとても頼もしく、高学年としての言動に成長を感じます。家庭科「私の生活、大発見!」の学習では、生活を振り返り、お母さんやお父さんの負担が大きいことに気付きました。家族の一員として、生活をよりよくしようと、自分ができることは何かを考えました。主体的に家庭生活を実践する意欲を高めました。</p>	<p><b>第6学年 20代2校目今年度異動者</b></p> <p>算数科「対称な図形」の学習では、身の回りの物や既習の図形を線対称や点対称として見ることで、対称な図形の意味や特徴の理解を深めることができました。問題を自力解決する力も育っています。体育館にマスクが落ちていた際、自分から進んで拾って捨てました。落とし物も気付いたら拾うことが多く、進んで校舎の美化に努める様子が見られました。</p>

**資料6 発達に課題がある子どもたちへの対応について**

特別支援教育全体会の中で、校長から教職員に説明・お願いした内容

子どもは当然ながら未成熟です。そこには2つの未成熟さがあります。一つは、発達の過程にあるレベル的な未成熟さと、もう一つは、凸凹のバランスが悪い未成熟さです。レベル的なものについては、発達の過程にあり、学びの途中な訳ですから当然と言えます。しかし、凸凹については意外に見落としがちです。

その凸凹具合は、昔の子ども以上に大きくなっていると感じています。要因はいくつかあると思っています。一つの要因として、社会的な環境として、大量の情報が直接入ってくることで、大人の口出しが格段に増えたことがあると思います。これらによって、凸の部分が大きくなっています。つまり昔の子どもが知らなかったことを、今の子どもたちはたくさん知っています。ところが、知っていることとそれらを正しく使えることは別です。感情的にも技術的にも未発達なのですから、そんなに簡単には使えません。知ってはいるのに使うことはできない時点で、凸凹はかなり大きくなっています。例えば、大人とは付き合えるけど、子どもとは人間関係が築けない子どもがとでも増えています。身近で思い浮かぶ子がいると思われます。

さらに、大きい要因が発達の問題です。環境や時代背景的なものにより、感覚を統合させる機会が激減したことが大きいです。少年 kimura の小学校時代、登下校中だけを振り返っても、「縁石から落ちずにどこまでいけるか」、「車とすれ違うたびに車の影をジャンプして飛び越す」、「車が連続できたらその分大きくジャンプして影は決して踏まないように頑張る」、今思い返すと、朝から晩まで一日中感覚を統合するために、何かしら動いていたように思います。

感覚統合がうまくいかない場合、様々な感覚情報を脳が適切に整理(感覚の強弱を調整したり、受け入れる量を調節したりする)できなくなり、日常生活で様々な困難が生じます。集中力低下、不器用さ、運動能力の低下、情緒の不安定さ、さらには学習やコミュニケーションの問題などの困難につながることがあります。

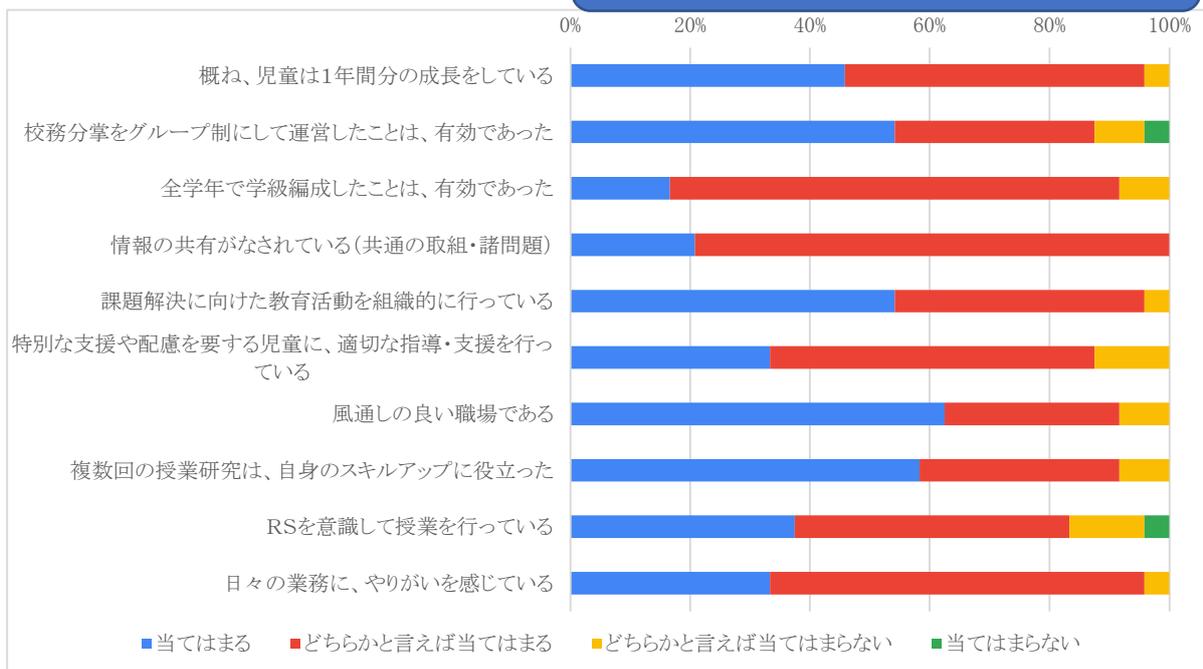
こんなふう凸凹が大きかったり、発達に課題を抱えていたりする子に対し、周りで関わる人間全員が同じ価値観や対応だと、収まるところがなく、はみ出る子が必ず出てきます。

モラルは社会で自立していくために、当然大切です。そして、そのモラルは社会に出る段階である程度確立している必要があります。小学生の現段階での優先順位は何かを考えると、凸凹のある自分を認めること・凸凹のある自分を受け入れられること・凸凹のある自分とうまく付き合えること→活躍できる場所を見つけるためにも、まずは学校と繋がっていることが大事だと考えます。

収まる居場所を提供する大人、モラルを教える大人、自分との向き合い方を教える大人、勉強を教える大人、凸凹に合わせて様々な役割分担があって良いのではないかと考えます。

**資料7 令和6年度 学校経営・運営評価**

令和6年度 学校経営・運営について、無記名で評価を受けた。次頁のとおり、具体的なコメントも受け付けた。



【学級編成】

○児童同士や教師と児童間のより良い関わりが生まれるため、毎年の学級編成は基本的に賛成だと考える。ただ児童同士に新しいつながりができて、悪い影響を与え合っている様子も見られる。慎重に行っていく必要がある。  
○生徒指導面から見て、1年でのクラス替えは高学年では有効な面が多いような感じがする。

令和6年度 学校経営・運営評価で寄せられた主なコメント。●の課題については、令和7年度「校務分掌グループ」と「現職教育計画」に反映させた。

【校務分掌グループ制】

○校務分掌をグループ制にした事で、先生方の意見を聞くことができ、自信を持って運営を進めることができました。  
○グループ制の運営は、来年度も継続して行うとよいと思う。  
○校務分掌をグループ化することにより、業務を抱え込むことなく、共同的に取り組むことができました。  
○グループ分けについて、グループによっては話し合う内容に軽重があり、それに合わせた人数の配置があると良いと感じました。グループで話し合う場が定期的にあったのは、共通理解を図る上で有効でした。  
●教育調査部や合唱部についてもグループ制に加えて、複数人で対応できるようにしてほしい。(少数体制では対応できないため)

【特別な支援や配慮を要する児童への対応】

○保護者への対応を担当だけではなく、校長先生や教頭先生にも入っていたのは良かった。また、ケース会議を開いてもらったことも良かった。

【複数回授業研究】

○1人複数回研究授業は修正して授業改善ができたので良かったです。  
●複数回の授業はスキルアップには良かったが、学年で互見授業の回数としては10回以上あり、自習体制をとるのは大変だった。出張等を考えると授業を進めたいところもあった。

【やりがい】

●業務にやりがいは感じているが多忙感もある。

令和6年度 学校経営・運営評価で明らかになった課題を反映させ、グループのカテゴリを若干修正するとともに、グループの配当人数に軽重をつけた。

資料8 校務分掌グループ

令和7年度 校務分掌グループ

1 校務運営委員会：校長・教頭・教務主任・学年主任・分掌グループ主任・養護教諭・主査

2 分掌グループ ※担当欄が「-」のところはグループ全員で担当、もしくはグループ内で協議して分担する

分掌グループ	A (6) S, K C, T, K 2, II	B (8 : 特支6) S 2, E	C (3) T 2, K 3, H	D (3) U, S 4, K 4	E (4) T 3, T 4 T 5, T 6	F (5 : 養護・栄養) H 2, K 5, W
教科	- 国語科 - 算数科 - 外国語	- 図画工作科	- 音楽科 - 家庭科	- 総合的な学習 - 生活科 - 社会科 - 理科	- 道徳科 - 特別活動	- 体育科
委員会	- 学力向上 - 現職教育	- 生徒指導 - 特別支援	- 防災教育 - 安全教育	- 地域協働連携 - 体験活動	- 学校評価 - 服務倫理	- 学校保健 - 給食食育
教育研究	図書館	- 生活指導 - 教育相談 - 人権	- 放射線	- 体験活動 - 環境(緑化・掲示) - 情報	- ボランティア - キャリア	健康教育 H2 体育 H3 保健 N 給食 W 清掃
教務	K2 教育調査評価	M 教科書		K4 学籍・統計		
行事	K 儀式	S3 遠足集団宿泊	K3 安全	U 文化		H2 健康体育 勤労生活部
PTA	- 教養	- 選管・地区	- 学年	- 環境	- 広報	- 厚生
児童会	- 図書	- 広報	- ベルマーク	- 園芸 - 放送	- 代表 - ボランティア	- 運動 - 給食 - 保健
その他特活	-	-	T2 地区児童会	-	T6 クラブ活動	
渉外	S 指導員(RS) C 作文・感想文審査 T 学力向上(家学) S 小教研算数理事 K2 小教研英語理事	S2 学警選・生指担当者 M2 専門調査員	K3 防災担当 T2 相新音楽祭 - 安全確保連絡協議会	U 児童クラブバス U 市教研 K4 小教研社会理事 S4 小教研生総理事 K4 少年センター	T3 JRC T5 小教研学校委員	H2 相新体育大会 H3 スポーツ振興センター H3 PTA安全互助会
省令主任等	C 研修主任 K2 英語活動推進教師	S2 生徒指導主事 S3 特別支援コーディネーター		K4 地域連携推進	T5 道徳教育推進教師	W 保健主事 W 食育コーディネーター

3 合唱部 (T 2・T)

4 桜友会 (教頭・教務・T 7)、丘友会 (教頭・教務・S 5)、管轄 (K 6・S 5・教頭)

**資料9 第1回運営委員会資料**

**4月運営委員会**

2025年4月1日(火) 11:00～

1 協議事項等の提案について

(1) 基本的な流れ

- ① グループ会議→運営委員会→職員会議
- ② 管理職や学年主任・ブロック主任の事前協議が必要な案件は、運営委員会を通す。
- ③ 運営委員会(校長へ)・職員会議(教頭へ)の2日前までに協議案件カードと、当日までに協議関係文書を提出する。

(2) 協議内容の基本的な考え方

- ① ねらいを大切にしたい。→網羅せずに、ねらいを絞り込む。絞り込んだねらいが、その計画のオリジナリティを表現することになる。子ども達と共有できる文言で表現したい。
- ② きまり等は、一般化する以上は100%達成させる覚悟で、全教職員が一丸となって取り組みたい。(割れ窓理論) 達成できないと思うものは提示しない。最初は、必要最小限の徹底させなければならないものだけにしましょう。

(3) 各グループで強化していきたい内容

A	○授業力向上(複数回の授業研究→授業案の簡略化・事前研なし・自由参加) ●「さくらっ子賞」の企画・運営
B	○指導事項の徹底、情報の共有、特別な支援配慮を要する児童の居場所づくりや適切な就学指導
C	○危険予測・危険回避能力を育成するための各種訓練設定の工夫、子どもの安全確保連絡協議会を活性化
D	○外部人材(市学習支援ボランティア)の積極的な活用、故郷に愛着がもてる地域学習の積極的な導入 ●子どもの「よさ」が共有できる環境づくり
E	○児童会活動を軸に下学年児から憧れられる上学年児の育成(自治的自発的な児童会委員会活動・代表委員会を機能させる、縦割り班活動の有効活用) ●「よさ」の価値を広げ、自分の「よさ」に気付かせ、確かめる活動の工夫 ●「さくらっ子スマイルカンパニー」企画・運営
F	○縦割り清掃、自己管理能力の育成、記録への目標設定と累積を「よさ」に ●学校保健委員会を機能させる(虫歯治療・肥満指導)

(4) スケジュール

グループ	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
グループ	1, 2, 3, 4	9	2	7	-	5	6	7	8	13	13	-
運営委	1	12	9	11	-	8	10	10	15	16	16	25
職員会	1, 3, 7	23	13	18	25	12	17	17	23	23	20	25

年度のスタートは、

- 1 職員会議(学校経営方針の説明)
  - 2 運営委員会(グループ会議・運営委員会・職員会議について関係性の説明、各グループにおいて強化して取り組んでほしい内容依頼、スケジュール確認)
  - 3 グループ会議(第2回職員会議で提案する内容の協議、共有する内容の確認)
- とした。

★ この時の第1回運営委員会において、「さくらっ子賞」と「さくらっ子スマイルカンパニー」について、別資料を使って提案をした。



運営委員会



グループ会議 (A)



グループ会議 (B)



グループ会議 (F)



臨時学年主任会

教務主任が丁寧にコーディネートしてくれており、グループ会議当日にグループの代表に声をかけ、必須の協議内容や協議の場所を確認している。協議の場所は、職員室の黒板に板書して周知してくれているため、確実に運用されている。

さらに教務主任は、必要に応じて「臨時学年主任会」を設定し、教育活動の内容によってはより丁寧に調整をしてくれている。

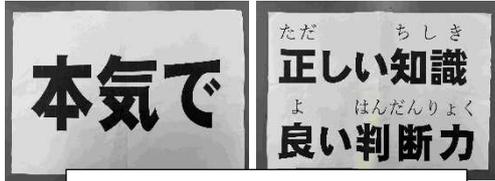


資料12 各種避難訓練・安全教室時の校長の話



避難訓練校長の話

各種避難訓練・安全教室の「校長の話」で毎回使用する、3枚のカード。避難訓練や安全教室は、「自分と自分の大切な人の命を守るためにやります」→「だから本気でやるのが大事です」→「本気でやるから、命を守るための正しい知識と良い判断力を鍛えることができます」



校長の話で使用するカード

資料13 教材費支出伺・使用確認書(1学期)

品名	部局	品目	単価	単数	令和7年度 令和7年7月11日						
国語	図書	国語ワークブック	308	25,000	年額	相双教育用品	○				
国語	図書	おかしなかんじのワークブック(上下)	308	23,000	年額	文芸堂	○				
国語	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	308	23,000	1学期	文芸堂	○				
国語	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	308	23,000	年額	相双教育用品	○				
国語	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	308	23,000	年額	文芸堂	○				
算数	図書	算数ワークブック	338	26,000	年額	相双教育用品	○				
算数	図書	算数ワークブック(上下)	508	38,000	年額	相双教育用品	○				
算数	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	378	28,100	年額	文芸堂	○				
算数	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	208	15,200	年額	文芸堂	○				
国語	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	1,088	82,800	1学期	文芸堂	○				
算数	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	410	31,100	年額	相双教育用品	○				
国語	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	1,888	14,400	1学期	文芸堂	○				
その他	図書	学習ワーク(18歳未満)	800	68,400	年額	文芸堂	○				
その他	図書	算数のワークブック(18歳未満)	400	34,200	1学期	文芸堂	○				
その他	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	220	16,700	2学期	相双教育用品	○				
その他	図書	おもしろいおひなごころ(上下)	130	9,800	年額	文芸堂	○				
				今回支出額計	984,500						

品名	部局	品目	単価	単数	令和7年度 令和7年7月10日						
国語	図書	国語ワークブック(国語あり)	308	19,200	年額	相双教育用品	○				
国語	図書	国語ワークブック	378	22,200	年額	文芸堂	○				
国語	図書	国語ワークブック(国語あり)	500	30,000	年額	相双教育用品	○				
国語	図書	ローマ字練習	340	26,400	年額	文芸堂	○				
社会	図書	算数ワーク(上下)	490	29,400	年額	相双教育用品	○				
算数	図書	算数ワーク(国語あり)	320	19,200	年額	相双教育用品	○				
算数	図書	算数ワーク(国語あり)	500	30,000	年額	相双教育用品	○				
算数	図書	算数のワーク(上下)	350	33,000	年額	文芸堂	○				
理科	図書	まめぞんまめぞん(国語)	510	30,600	2学期	相双教育用品					
理科	図書	まめぞんまめぞん(国語)	100	6,000	2学期	相双教育用品					
理科	図書	風やぶのむらさき(国語)	220	13,200	1学期	文芸堂	○				
理科	図書	風やぶのむらさき(国語)	290	23,400	年額	相双教育用品	○				
				今回支出額計	385,800						

年度初めに作成した「教材使用届」にデータを連動させ、「納品状況」「教材使用状況」をこの一覧表と照らし合わせて確認する。「教材使用状況」は学年主任と学年会計担当者が確認する。「納品状況」は学年会計担当者と主査が納品書・領収書をもとに確認する。最終的に、管理職が全ての帳簿や伝票を確認する。

資料14 教職員が主体的に立ち上げた事業(いじめ宣言)

さくらっ子「いじめ防止宣言」

一方的にからかわれたり、悪口を言われたりするなどで、あなたがいやな気持ちになれば、それは「いじめ」です。

桜丘小学校の児童の中で、いじめられていない子はいません。

**「いじめ」は**  
「しなやか」「元気な」「勇気ある」  
実践された学校生活のために、自分から行動を起こすことを約束し、ここにいじめ防止を宣言します。

子どもの案で自由に作る。

①  
②  
③  
④

のように作る。

どちらでもいいです。

**Bグループ作成**

4月1回目の「全校集会」は、令和5年～7年の3年間「いじめを許さない学校宣言」を行ってきた。校務分掌グループが主体的に動き始めた1つとして、BグループとEグループと連携し、児童会代表委員会を動かして「さくらっ子いじめ防止宣言」を「さくらっ子」のあいうえお作文で作成した。児童会を動かす発想には、児童の【よさ】を引き出す意図を感じた。発表も、昼の放送や1学期末終業式でも行うなど、繰り返し行わせた。短い期間で児童に浸透しつつある。



代表委員が作成・掲示



1 学期終業式で発表

よいトイレの使い方を募集

トイレの使い方が乱れた時、これまでであれば犯人を捜したり正しく使うように全体指導をしたりしてきた。それが、「よい使い方」を児童に募集をした。多くの児童が反応をし、付箋紙に書き込んで投稿した。この取り組みにより、トイレの使い方が改善した。

資料 15 相馬市小・中学校いじめ調査

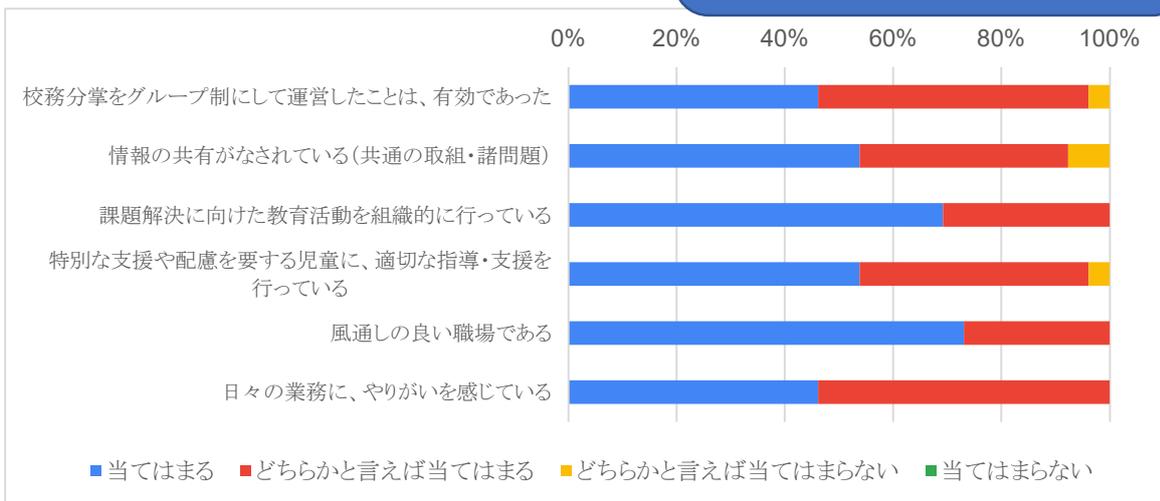
■ R7 いじめに関する調査票 (相馬市小・中学校)

		桜丘小		学校				
○ いじめの認知件数、現在の状況を記入してください。								
区 分	1 学期					現在の状況		
	4	5	6	7,8	計	解消 (観察中)	解決に 向けて 取組中	その他
1	ひやかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。					0		0
2	仲間はずれ、集団による無視をされる。					0		0
3	軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたかれたり、蹴られたりする。					0		0
4	ひどくぶつかられたりたたかれたり、蹴られたりする。					0		0
5	金品をたかられる。					0		0
6	金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。					0		0
7	嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。					0		0
8	パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる。					0		0
9	その他( )					0		0
	その他( )					0		0
	計	0	0	0	0	0	0	0

○ いじめの定義はいじめ防止対策推進法によるものです。  
 ○ 「区分」「現在の状況」は、変容を捉えるため昨年度と同じ調査項目にしております。  
 ○ 令和2年4月からの件数です。発生した月に件数を記入してください。  
 ○ 「区分」が複数になる場合は、主な区分でカウントしてください。(複数選択不可)  
 ○ その他の欄が不足する場合は、行を追加して記入してください。  
 ○ 「現在の状況」は、提出した時点での状況です。1学期に「取組中」だったが2学期に末には解消となった場合は2学期の提出時点で「解消」に変更する必要があります。  
 ○ 提出バ切：1学期7月25日(金)、2学期12月25日(木)、3学期3月19日(木)

令和7年度7月実施。学校経営・運営について、無記名で評価を受けた。前年からの変容だけでなく、年度内の変容も確認して評価の精度を高めるために実施した。

資料 16 令和7年度1学期 学校経営・運営評価



参考資料

「Society 5.0 に向けた人材育成 ～ 社会が変わる、学びが変わる ～」 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース  
 「第7次福島県総合教育計画」福島県・福島県教育委員会